

校長室だより

昨日は2学期の始業式でした。

長い夏休みを終え、久しぶりに学校に子供たちの歓声が戻ってきました。子供たちが集まれば、そこには大小様々なトラブルが発生することでしょう。

トラブルは「人と関わる力」を育てる (ケンカから学ぶことも)

学校という小さな社会の中で、子供たちは日々、多くの友だちと関わりながら過ごしています。意見の食い違いや、ささいな誤解から、子供同士のトラブルやけんかが起きることがあります。

我が子が傷ついたり、涙を流したりしている姿を見ることは、親として非常に心が痛むものです。すぐに大人が介入して、どちらが正しくてどちらが間違っているかを白黒つけたくなることもあるかもしれません。

まずは我が子の言い分を聞いて、その思いに寄り添ってあげてください。ただしそのまま鵜呑みにはしないでください。

トラブルの発生には、それぞれに言い分があり、周囲の子の話も聞いた上での「事実確認」が大切であり、安易に「加害」、「被害」を決めつけることはできません。

私たち学校職員は、子供同士のトラブルを、単に「困った出来事」としては捉えていません。むしろ、「人との関わり方や、トラブルの乗り越え方を学ぶための、かけがえのない教育の機会(チャンス)」であると考えています。

大切なのは、トラブルが起きた時、子供たちがそれを「どうやって解決していくかというプロセス(過程)」です。学校では、トラブルが起きた際、まずは双方の子供の「悔しかった」「悲しかった」という感情に寄り添い、それぞれの言い分に耳を傾けます。そして、事実を確認した上で、次のようなステップを子供たち自身が経験できるようにしています。

- ・自分の気持ちを言葉で伝えること
 - 感情をぶつけたり、暴力を振るったりするのではなく、何が嫌だったかを伝える
- ・相手の気持ちや事情を想像してみること
 - 「相手にはどんな理由があったのだろう」と考える
- ・これからどうすればお互いが気持ちよく過ごせるか、解決策を一緒に考えること

大人になると、理不尽なことや意見の合わない人と協働しなければならない場面に必ず直面します。その時に必要な「折り合いをつける力」や「関係を修復する力」は、子供の頃の失敗や葛藤、それを乗り越えた体験の積み重ねによって育っていくと考えています。雨降って地固まるように、自分たちで知恵を出し合い、痛みを分かち合って解決したトラブルの後には、以前よりも絆が深まるものです。

これからも学校では、子供たちのトラブルを頭ごなしに叱るのではなく、一人一人の心の成長に繋がるよう、丁寧に関わってまいりたいと考えています。

御家庭でも、お子様からお友だちとのトラブルを聞いた際には、まずは「悔しかったね」「嫌だったね」とその気持ちを受け止めていただき、「これからどうしたらいいと思う?」と、子供自身が考える第一歩を温かくサポートしていただければ幸いです。

学校と家庭が手を取り合い、子供たちの「未来を生きる力」を育てまいりたいと考えています。

2学期も引き続き、本校の教育活動に御理解と御協力をお願いいたします。 校長 中田邦明